HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ語から見たゲルマン語(5) : 人称代名詞
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 164, 19(左)-41(左)
Issue Date	2021-07-16
DOI	10.14943/bfhhs.164.l19
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/82371
Type	bulletin (article)
File Information	04_164_Shimizu.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究院紀要 164 （2021）

ドイツ語から見たゲルマン語（5）
── 人称代名詞 ──

清　水　　誠

German as a Germanic Language（5）
— Personal Pronouns —
（*Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences* No. 164.
Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University.
Sapporo/Japan. 2021. ISSN 2434-9771）

SHIMIZU, Makoto
（mshimizu@let.hokudai.ac.jp）

1-1. 英語とドイツ語の人称代名詞―概観[1]

名詞，形容詞，代名詞，数詞からなる名詞類の中で，人称代名詞ほど例外

[1] 本研究は清水（2019）（2020）（2021a）（2021b）の続編であり，科研費の助成による（ゲルマン語類型論から見たドイツ語の新しい構造記述，基盤研究（C）（一般），19K00540）。カッコ内の用語は原則として英語名による。用例などで使用する言語名の略語は次のとおり。ア：アイスランド語，ｱﾙ：ドイツ語アルザス方言，印欧：印欧祖語，英：英語，ｴﾙ：スウェーデン語エルヴダーレン方言，オ：オランダ語，ゲ：ゲルマン祖語，ゴ：ゴート語，古英：古英語，古オ：古オランダ語，古高ド：古高ドイツ語，古ザ：古ザクセン語，古ﾉ：古ノルド語，ザ：（西）低地ドイツ語北低地ザクセン方言，ス：スウェーデン語，ﾁｭ：スイスドイツ語チューリヒ方言，デ：デンマーク語，ド：ドイツ語，西ﾌ：西フリジア語，ﾆｭ：ノルウェー語ニューノシュク，バ：上部ドイツ語バイエルン方言，ブ：ノルウェー語ブークモール，ベ：スイスドイツ語ベルン方言，ﾌｪ：フェーロー語，メ：（東）低地ドイツ語メクレンブルク・フォーアポマーン方言，モ：北フリジア語モーリング方言

10.14943/bfhhs.164.l19

の多い品詞のカテゴリーはない。英語とドイツ語を比較してみよう[2]。

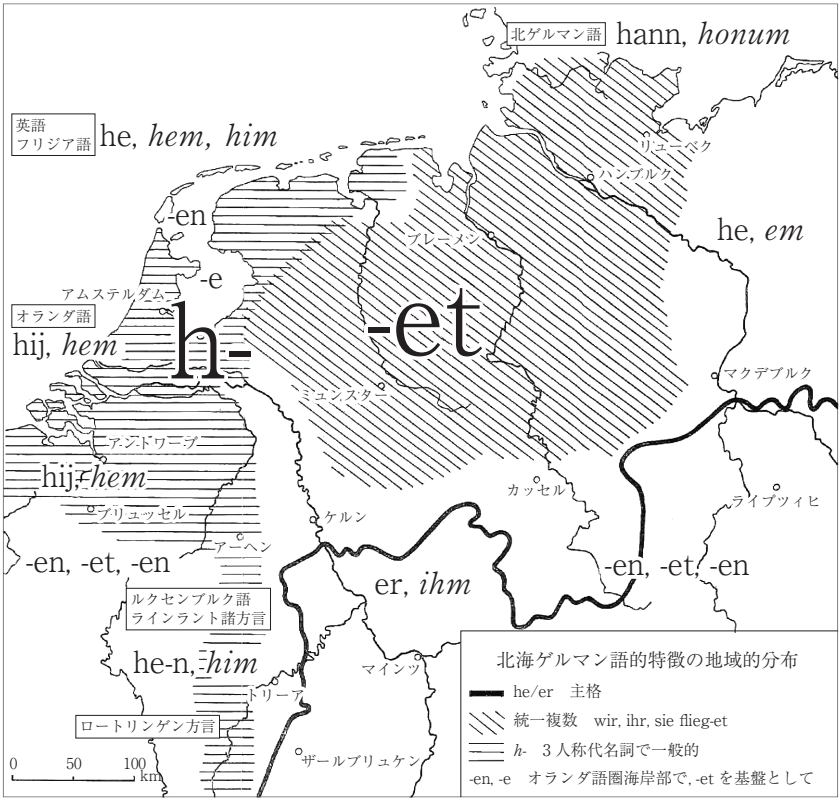
(1)	英 主格—目的格—所有代名詞	ド 主格—対格—与格—属格
1人称	単数 I — me — mine	ich — mich — mir — meiner
	複数 we — us — ours	wir — uns — uns — unser
2人称単・複数	you — you — yours	親称 単数 du — dich — dir — deiner
		複数 ihr — euch — euch — euer
		敬称 単・複数 Sie — Sie — Ihnen — Ihrer
3人称	単数 自然性	文法性
	男性 he — him — his	男性 er — ihn — ihm — seiner
	女性 she — her — hers	女性 sie — sie — ihr — ihrer
	物事 it — it — its	中性 es/'s — es/'s — ihm — seiner
	複数 they — them/('em) — theirs	sie — sie — ihnen — ihrer

この不規則性の背後には，歴史言語学的な理由が隠されている。まず，「英 me-***Ø***/we-***Ø***/you-***Ø***/he-***Ø*** ↔ ド mi***r***/wi***r***/ih***r***/e***r***」を比較しよう。「英 -Ø↔ド -r」は「北海ゲルマン語的特徴」（ド Ingwäonismen）の1例で，古英語が語末音 -r を失った結果である。ゴート語では（(6) 参照），mi***s***/wei***s***/ju***s***/i***s*** (-s＜ゲ *-z) のロータシズム（-r＜ゲ *-z /z/）を経ていない -s がドイツ語の -r に対応する。

英語の you は中英語の目的格に由来し，本来の主格は古めかしい ye「汝（なんじ）（ら）」である。-r を保つド ih***r***「君たち」（＜古高ド ir＜*jir（ihr の h は長音記号）＜ゲ *jūz）とは，同じ語源である。英 you は敬称「あなたがた」に用いた複数形の単数への拡大で，親称単数のド du「君」にあたるのは，英 thou「汝（なんじ）」である。大文字で書く敬称のド Sie「あなた（がた）」は，3人称複数 sie の転用で，遠回しに聞き手を示唆した表現である。ドイツ語の Sind ***Sie*** Japaner? 「あなたは日本人ですか」は，本来，英語の Are ***They*** a Japanese?

[2] ドイツ語では代名詞属格 meiner「私」と所有代名詞 mein「私の（もの）」は別形。

図 1　北海ゲルマン語的特徴の地域的分布



（Frings/Lerchner 1966: Karte 22 変更）

に対応する。

「英 he↔ド er」も本来は同じ語である。英 he は上記の「北海ゲルマン語的特徴」を反映して，ド er の -r が脱落し，残された母音 e が心細い「1 音性」（ド Einlautigkeit, Krahe/Meid 1969[7]b: 57）をカバーするべく，英 ***h***ere「ここ」/ド ***h***eute「今日」（＜古高ド ***h**iu tagu この日に）の指示詞標識 h-をまとった語形である。南部の チュ er/ベ är/バ ea に対して，北部では，オ ***h***ij/西フ ***h***y/ザ・メ ***h***e/ル ***h***ien のように分布している（**図表 1** 参照）。その中間に位置していた古高ドイツ語ラインフランケン方言（または西フランケン方言）が母

体の『ルートヴィヒの歌』（ド *Ludwigslied* 881/882）には，折衷形 her（古ザ hē）が見られる（Müffelmann 1970: 18, Braune/Reiffenstein 2004[15]: 243）。

(2) 古高ド Einan kuning uueiz ih, Heizsit ***her*** Hluduīg, / Ther gerno gode thionōt: Ih uueiz ***her*** imos lōnōt. ある王を（einan kuning）私は知っている（uueiz ih），彼は（***her***）フルドウィーグ（ルートヴィヒ Hluduīg）という名であり（heizsit），/ 熱心に（gerno）神に（gode）仕えている（ther～thionōt）：神（＝彼 ***her***）は彼に（imo）それを（-s）報いることを（lōnōt）私は知っている（ih uueiz）

（Braune/Ebbinghaus 1979[16]: 136）

1-2. 1・2 人称代名詞―発話状況の人間代名詞

1-2-1. 双数に由来する複数

次に，1・2 人称に着目しよう。西ゲルマン語との対比で，北ゲルマン語からアイスランド語，古ノルド語，フェーロー語を挙げる[3]。フェーロー語では属格が衰退していているが，機能語である人称代名詞では残っている。

(3) ア/（古ノ）主格―対格―与格―属格　ﾌｪ 主格―対格―与格―属格

1 人称 単数 ég ― mig ― mér ― mín　　eg ― meg ― mær ― mín

（古ノ ek ― mik ― mér ― mín）

複数 við ― okkur ― okkur ― okkar　　vit ― okkum ― okkum ― okkara

［尊厳の複数 vér ― oss ― oss ― vor］

（古ノ 双数 vit ― ok(k)r ― ok(k)r ― okkar↔複数 vér ― oss ― oss ― vár）

2 人称 単数 þú ― þig ― þér ― þín　　tú ― teg ― tær ― tín

（古ノ þú ― þik ― þér ― þín）

［敬称 単(・複) þér ― yður ― yður ― yðar　単 tygum ― tygum ― tygum ― tygara］

---

[3] ﾌｪ eg[e:]/meg[mɛə]/teg[tʰɛə]/tygum['tʰi:jʊn] の g の文字は発音しない。

複数 þið ― ykkur ― ykkur ― ykkar　　tit ― tykkum ― tykkum ― tykkara
（古ノ 双数（þ)it ― yk(k)r ― yk(k)r ― ykkar↔複数（þ)ér ― yðr ― yðr ― yð(v)ar）

「英 we-***Ø***/you-***Ø***↔ド wi***r***/ih***r***」に対して，「ア vi***ð***/þi***ð***/ﾌｪ vi***t***/ti***t***（＜古ノ vi***t***/(þ)i***t***）」となっている[4]。「英 -Ø/ド -r」に「ア -ð（＜古ノ -t)/ﾌｪ -t」が対応するのは，なぜだろうか。古風なアイスランド語には，vé***r***/þé***r***（＜古ノ vé***r***/(þ)é***r***）「私たち/あなたがた」が残っている。þé***r***「あなた」は þú「君」に対する敬称だが，ほとんど使わない[5]。vér は王が「我々フリズリク」（ア vér Friðrik）などと自称した「尊厳の複数」（plural of majesty）で，いかめしい文章でも稀（まれ）である（森田 1981: 77, Kress 1982: 104）。じつは，由緒正しい複数形は vé***r***/þé***r*** だった。両者の語末音 -r は，ド wi***r***/ih***r*** と共通で，ゴ wei***s***/ju***s***（＜ゲ *wejez, *weiz/ *jūz）の -s に対応する。ゴート語の -s（＞ア/ﾌｪ -r）は，北ゲルマン語と違ってロータシズムを経ておらず，英語の名詞複数形 -(e)s（＜ゲ *-(i/e)z＜印欧 *-es）の -s と同じ複数形語尾に由来する（Krahe/Meid 1969[7]b: 53）。ゴ dagō***s***/古英 daga***s***/古ノ daga***r***「日々」（単数 dags/dæġ/dagr）と比較されたい。

現代の北ゲルマン語では，２人称の敬称代名詞はほとんど用いず，親称代名詞に由来する１種類にほとんど統一されている。大陸北ゲルマン語と違って，動詞の人称・数の変化を統一語尾に簡素化していないアイスランド語とフェーロー語でも，同様である。その両言語では，使用が稀（まれ）な２人称敬称代名詞単数形（ア þér/ﾌｪ tygum）が主語になると，補語の名詞・形容詞は単数形だが，定動詞は複数形になる。ドイツ語では「叙述用法」（attributive use）の形容詞は無変化だが，補語が名詞の場合にはやはり同様である。

（4）　ア Þér ***eruð kennari***. あなたは先生（単数 kennari）です（複数 eruð↔単数 ert）

---

[4] 「ア ***þ***ið/***þ***ér＜古ノ (þ)it/(þ)ér，ﾌｪ ***t***it＜古ノ (þ)it」の þ-/t-の付加は，「動詞 -t＋人称代名詞」の語順で動詞語尾 -t が人称代名詞の語頭に異分析されたことによる。

[5] ア þér は þið「君たち」に対して「あなたがた」の意味にもなる（Kress 1982: 104, Thomson 1987: 334）。ﾌｪ tygum「あなた」は単数のみ。

フェ Tygum ***eru*** {***vakur/vøkur***}. あなた（男性/女性）は美しい（複数 eru（↔単数 ert）＋男性単数 vakur/女性単数 vøkur）

ド Sie ***sind*** {***Lehrer/Lehrerin***}. あなた（男性/女性）は先生（男性/女性）です（複数 sind＋男性単数 Lehrer/女性単数 Lehrerin）

今では一般的な vi***ð***/þi***ð***「私たち/君たち」は，「双数」（dual）の転用だった。この世は 2 者のペアがつきもので，「1 つ，2 つ，たくさん」という数え方は，言語類型論的にも珍しくない。古ゲルマン諸語には，1・2 人称代名詞に双数形が残っていた（古高ドイツ語は属格 unkēr のみ例証）。ア vi***ð***/þi***ð***（＜古ノ vi***t***/(þ)i***t***）は，ゴ wi***t***/*ju***t***（主格は推定形＜ゲ *weta/*juta）に対応する。ア -ð（＜古ノ -t）/ゴ -t は数詞「2」に由来し（Seebold 1984: 25f.），we- two/you- two の構成である（Lehmann 1994: 27）。

ゴート語は，動詞の直説法能動態現在形で複数形（ゴ baíram/baíriþ 私たち/君たちは運ぶ ←baíran）と双数形（ゴ baírōs/baírats 私たち/君たち 2 人は運ぶ）を区別する。人称代名詞双数形は，北フリジア語モーリング方言の 1 / 2 人称 wat/jat とセルリング方言の 1 / 2 / 3 人称 wat/at/jat（＜ja 3 人称複数，Seebold 1984: 58, Howe 1996: 193），上部ドイツ語バイエルン方言の 2 人称 ees（Merkle 1990: 123）に残っている。しかし，バイエルン方言では 13 世紀から複数の意味を表し（ヴァインホルト他/井出訳 2017: 77, 79），北フリジア語では使用が稀（まれ）である。次はモーリング方言の例だが，実際はほとんど使わない。

(5) モ Min wüf än ik — ***wat*** hääwe fjouer bjarne. 妻（min wüf）と（än）私（ik）—私たち 2 人には（wat）4 人の子供が（fjouer bjarne）います（＝持っています（hääwe））（清水 1992: 100）

1-2-2. 対格と与格の識別と融合

次に，1・2 人称の対格と与格を検討しよう。単数については，「英 目的格 me-***Ø***↔ド 対格 mi***ch***/与格 mi***r***」を比べると，英語には「対格 -ch/与格 -r」

の目印がない。1-1 で述べたように，英 you は古くは複数目的格だった。以前の 2 人称単数主格は聖書などに登場する thou「汝（なんじ）」（ド du）で，やはり「英 目的格 thee-***Ø***↔ド 対格 di***ch***/与格 di***r***」の対立である。ゴート語も「対格 -k/与格 -s」（ゴ mi***k***/mi***s***←ik 私，þu***k***/þu***s***←þu 君）で，「ド 対格 -ch/与格 -r[6]」に対応する。(3) の北ゲルマン語も，ア mi***g***/mé***r***，ﾌｪ me***g***/mæ***r***（＜古ノ mi***k***/ mé***r***）「私」，ア þi***g***/þé***r***，ﾌｪ te***g***/tæ***r***（＜古ノ pi***k***/þé***r***）「君」となるので，「対格 -g（＜-k）/与格 -r」のマークがある。次にゴート語と古高ドイツ語の変化表を示す。

(6)	ゴ 主格―対格―与格―属格	古高ド 主格―対格―与格―属格
1 人称	単数 ik ― mik ― mis ― meina	ih ― mih ― mir ― mīn
	双数 wit ― ugkis ― ugkis ―*ugkara	Ø[7]― Ø ― Ø ― unkēr
	複数 weis ― uns, unsis ― uns, unsis ― unsara	wir ― unsih ― uns ― unsēr
2 人称	単数 þu ― þuk ― þus ― þeina	dǔ― dich ― dir ― dīn
	双数 *jut ― igqis ― igqis ― igqara	Ø ― Ø ― Ø ― Ø
	複数 jus ― izwis ― izwis ― izwara	ir ― iuwih ― iu ― iuwēr

「英 -Ø↔ド -r」は古英語が -r を失った「北海ゲルマン語的特徴」の反映である（1-1 参照）。ということは，英 me-***Ø***/thee-***Ø***「私/君」はド mi***r***/di***r*** の与格に対応し，与格が対格を吸収して目的格になったのだろうか。この問題は 1-2-3 で取り上げる。

北海ゲルマン語の後裔である西フリジア語（my-***Ø***/dy-***Ø***）と低地ドイツ語（ザ・メ mi-***Ø***/di-***Ø***），それに，北海沿岸で隣接するオランダ語（mij-***Ø***）も同様である。

---

[6] ド -ch[x, ç]＜-k は高地ドイツ語子音推移（第二次子音推移）による。ゴ -s はロータシズムを経たド/ア -r に対応する。

[7] 「Ø」は語形が例証されないことを示す。「*」は推定形である。

(7)　主格—目的格

		西フ	ザ	メ	オ
1 人称	単数	ik — my	ik — mi	ik — mi	ik — mij
	複数	wy — ús	wi — uns/uus	wi — uns	wij — ons
2 人称	単数	do — dy(親称)	du — di	du — di	jij — je(親称)[8]
	複数	jimme — jimme	ji — jo/ju/juuch	ji — ju/juuch	jullie — jullie(親称)

これに対して，大陸北ゲルマン語の 4 言語では，対格（ア mig/þig<古ノ mik/ þik）が与格（ア mér/þér<古ノ mér/þér）を吸収して目的格になった（デ mi***g***[mɑĭ]/ di***g***[d̥ɑĭ]，ス mi***g***[mɛj]/di***g***[dɛj]，ブ me***g***[mæi]/de***g***[dæi]，ニュ me***g***[me:g]/ de***g***[de:g]）。その移行過程を示すのが，古風な形態をとどめるスウェーデン語エルヴダーレン方言である（Åkerberg 2012: 217）。主・対・与格を保つ同方言も，ig［i]「私」/du「君」の与格は対格と同形の mi***g***［miɣ］/di***g***［diɣ］である[9]。

(8)　主格—目的格(対/与格)

		デ	ス	ブ	ニュ	エル
1 人称単数		jeg — mig	jag — mig	jeg — meg	eg — meg	ig — mig/mig
		[jɑĭ][mɑĭ]	[jɑ(:g)][mɛj]	[jæi][mæi]	[e:g][me:g]	[i][miɣ]
	複数	vi — os	vi — oss	vi — oss	vi/me — oss	wi̯ð — uās(s)/uās(s)
2 人称単数		du — dig	du — dig	du — deg	du — deg	du — dig/dig
		[d̥ɑĭ]	[dɛj]	[dæi]	[de:g]	[diɣ]
	複数	I — jer	ni — er	dere — dere	de — dykk	ið — ið/ið

複数ではどうだろうか。単数で対格と与格を区別する他の現代語でも，複数では両者の融合が進んでおり，(1) のドイツ語は「対・与格 uns-***Ø*** 私たち/

[8] 古オ thu（英 thou/ド du）は英 you/ド ihr にあたるオ jij に代わっている。

[9] 2 人称敬称には，デ De — Dem/ブ De — Dem/ニュ De — Dykk「あなた（がた）」があるが，ほとんど使わないので，(7) では割愛している。

eu***ch*** 君たち」である。（6）の古高ドイツ語では，「対格 unsi***h*** ―与格 uns-***Ø*** 私たち」/「対格 iuwi***h*** ―与格 iu-***Ø*** 君たち」なので，1 人称複数対格 uns-***Ø*** は与格（-Ø），2 人称複数与格 eu***ch*** は対格（-ch）との類推とわかる。

一般に複数では，語形変化が平均化する「統一複数」（ド Einheitsplural）の傾向がある。しかし，（3）に示したアイスランド語では，すでに古ノルド語でも対格と与格が同形だった（対・与格 okku***r***（＜古ノ ok(k)***r***）私たち/yk-ku***r***（＜古ノ yk(k)***r***）君たち/yðu***r***（＜古ノ yð***r***）あなたがた）[10]。（6）に示したゴート語の「対・与格 unsi***s*** 私たち/izwi***s*** 君たち/ugki***s*** 私たち 2 人/igqi***s*** 君たち 2 人」も，与格（-s）への類推である。3 人称では単複ともに対格と与格を峻別（しゅんべつ）していた古ゲルマン諸語だが，1・2 人称では事情が異なり，両者の融合が散見される。

1-2-3. 北海ゲルマン語的短形と対格・与格の区別

かたや，北海ゲルマン語の仲間だった古英語と古ザクセン語には，当時から対格と与格の目印を欠く語形，つまり，「北海ゲルマン語的短形」（ド ingwäonische Kurzform, Seebold 1984: 35）があった。語形には類書の間で微妙に差があるが，大まかに示してみよう。

(9)		古英 主格―対格―与格―属格	古ザ 主格―対格―与格―属格
1 人称	単数	iċ ― mĕ, meċ ― mĕ― mīn	ik ― mĭ, mik ― mĭ― mīn
	双数	wit ― unc ― unc ― uncer	wit ― unk ― unk ― unkero
	複数	wĕ― ūs, ūsiċ ― ūs ― ūser, ūre	wĭ, we ― ūs, unsik ― ūs ― ūser
2 人称	単数	þŭ― þĕ, þeċ ― þĕ― þīn	thŭ― thĭ, thik ― thĭ― thīn
	双数	ġit ― inċ ― inċ ― inċer	ġit ― ink ― ink ― Ø
	複数	ġĕ― ēow, ēowiċ ― ēow ― ēower	ġĭ, ġe ― iu, eu ― iu, eu ― iuwar, euwar

[10] フェーロー語の「対・与格 tykk***um*** 君たち/tyg***um*** あなたがた」の -um[ʊn] は，3 人称複数与格語尾と同じである。双数に由来する tykk***um***/tykk***um*** も同様。

対格と与格が目的格に融合した現代語も，「英 us-***Ø***/you-***Ø***/ザ jo-***Ø***, ju-***Ø***/メ ju-***Ø*** あなたがた」となる[11]。これは，1-1 で述べた「北海ゲルマン語的特徴」として語末音 -r が脱落した結果と重なる。しかし，どうして 1・2 称代名詞に限って，古語の時代から，あちこちで対格と与格が混合していたのだろうか。1-3-1 で述べるように，3 人称代名詞では，対格と与格の区別がある言語の場合には，両者は基本的に別々の語形である。語末音 -r の脱落だとしても，対格に -k/-ċ /tʃ/の目印を欠く与格と同じ異形が併存していた事実は，奇妙である（古英 mē, meċ/古ザ mǐ, mik 私；古英 ūs, ūsiċ/古ザ ūs, unsik 私たち；古英 þē, þeċ/古ザ thǐ, thik 君）。

ドイツのゲルマン語学者ゼーボルト（Elmar Seebold）は，ゲルマン祖語には対格と与格に共通の*me/*mi といった「前接語」（enclitic）の語形があり，「対格 *miz（＜印欧 *me＋-s）」↔「与格 *mik（＜印欧 *me＋-ǵe）」は，格の区別を明示する場合の特別な非前接的語形だったと推定している。「北海ゲルマン語的特徴」として与格の -r（＜*-z）が失われると，対格の -k も余剰的になり，前接語の語形に融合したという（Seebold 1984: 35f.）。ただし，対格と与格の区別は，古い印欧語でもヒッタイト語の人称代名詞を除いて明確だった。この事情についての統一的な説明はない（Howe 1996: 105–118）。

1・2 人称代名詞の対格の目印は，-ch（＜-h）/-ċ/-g（＜-k）/-k である（ド mi***ch***/古英 me***ċ***/ア mi***g***（＜古ノ mi***k***）/ゴ mi***k*** 私；ド di***ch***/古英 þe***ċ***/ア þi***g***（＜古ノ þi***k***）/ゴ þu***k*** 君；古高ド unsi***h***/古英 ūsi***ċ***/古ザ unsi***k*** 私たち；ド eu***ch***/古高ド iuwi***h***/古英 ēowi***ċ*** 君たち，など）。これは，ラテン語の ego「私」にあたる 1 人称単数主格（ド i***ch***（＜古高ド i***h***）/古英 i***ċ***/ア é***g***（＜古ノ e***k***）/ゴ i***k***（＜ゲ *eka））の -ch（＜h）/-ċ/-g（＜-k）/-k（＜印欧 *-ǵe）の付加によると言われている（Fulk 2018: 182–188, Krahe/Meid 1969[7]b: 52–55）。発話状況の当事者である話し手と聞き手のマーカーだったのだろう。

じつは，これは再帰代名詞（ド sich/ア sig など）にも共通している。この

[11] 西フ jo-***Ø***「あなた」/オ je-***Ø***「あなた（がた）」も参照。高地ドイツ語子音推移（-ch＜-k）を経たザ・メ juu***ch***「あなたがた」は高地ドイツ語的な語形なので（Niebaum 1983: 163），除外する。Cyriacks/Nissen（1998: 89）も jo/ju だけを記載している。

問題については，本稿の続編で扱う。

1-3. 3人称代名詞―人間・物事を示す有性代名詞

1-3-1. 有性代名詞と無性代名詞

以上の事実を3人称代名詞と比べてみよう。まず，1・2人称代名詞と3人称代名詞の違いは何だろうか。意味的には，前者は人間のみ（ペットなどの動物や擬人化した対象を含む）を指し，後者は人間と物事の両方を指す。もう1つ重要なのは，前者は性を区別しない「無性代名詞」(non-gendered pronoun）で，発話状況に依存して指示対象が「直示的」(deictic）に決まる点である。一方，後者は性を区別する「有性代名詞」(gendered pronoun）である。つまり，話者と聞き手以外の森羅万象について，性を頼りに，文脈（コンテクスト）に依存する「照応」(anaphora）の機能を司(つかさど)る。一部では，3人称代名詞は直示的機能を持つ指示代名詞と重なるが（1-3-2参照），基本的にはこれと区別して「照応代名詞」(anaphoric pronoun）とも言う。ドイツ語のich, der ***ich*** dich liebe「君のことを愛しているぼく」/du, die ***du*** mich nicht liebst「ぼくのことを愛していない君」という関係文中のich/du「ほく/君」には，照応の役割があると言えるが，あくまで余剰的で周辺的な用法である。

語形変化の点でも，3人称は性の区別を反映しつつ，1・2人称の対格（ド -ch/ア -g）と与格（ド・ア -r）とは目印が異なる。また，複数でも対格と与格を識別する。ドイツ語とアイスランド語で比較してみよう。

(10)　1人称単数：対格　ド mich/ア mig↔与格　ド mir/ア mér
　　対格　ド dich/ア þig↔与格　ド dir/ア þér
　↔3人称単数：男・中性：対格　ド ihn/ア hann↔与格　ド ihm/honum
　　女性：対格　ド sie/ア hana↔与格　ド ihr/ア henni
　1・2人称複数(＜ア 双数)：対・与格　ド uns/ア okkum, ド euch/ア þykkum
　↔3人称複数：対格　ド sie/ア 男 þá/女 þær/中 þau
　　↔与格　ド ihnen/ア þeim

ただし，(3) に挙げたフェーロー語の 1 ・ 2 人称複数与格 okk***um***「私たち」/tykk***um***「君たち」，それに tyg***um***「あなた」の -um は，3 人称複数与格 teim***um***「彼（女）・それら」と共通である。しかし，アイスランド語の複数与格 þeim（英 them）に対して -um が余計なので，3 人称経由の類推による付加であることがわかる。

対格と与格が融合した現代語の目的格の語形的区別にも，3 人称では性が関与している。たとえば英語では，「人間：与格 him/her（whom）」↔「物事：対格 it（that, what）」のように，意味に応じて両者の由来が異なる。つとにデンマークの英語学者イェスペルセン（Otto Jespersen 1860–1943）は，人間を表す代名詞は名詞や形容詞よりも間接目的語に使う頻度が高いためであると断定としている（Jespersen 1894: 183）。今でも英語学の概説書などに引用されることがある説だが，母語であるデンマーク語の mig/dig（英 me/thee）が対格由来（ド mich/dich）である事実には，説明を控えている[12]。「私」も「あなた」も普通は人間なのだが。

大陸北ゲルマン語では，(8) で見たように，1 ・ 2 人称代名詞の目的語は対格由来である。一方，3 人称代名詞は，ニューノシュクの (12)「主格 dei（英 they）―目的格 dei」を除いて，上記の英語と似た分布になる。語末音が「男性 -m/女性 -e」ならば与格，「両性 -n/中性 -t」ならば対格由来である（(13) ア（古ノ）与格：男性 -m/女性 -i/(-e)）参照）。1 ・ 2 人称では与格が対格と同形のエルヴダーレン方言も，3 人称複数は与格 diem/dyöm に融合している[13]。スウェーデン語の (11)「主格 de[dɔm]（英 they）/dom ― dem[dɔm]（英 them）」では，目的格が主格にまで及んでいる。

---

[12] “The reason of this constant preferring of the dative forms in the person-indicating pronouns is no doubt the fact that these pronouns are used as indirect objects more often than either nouns or adjectives; at any rate, it is a phenomenon very frequently found in various languages; compare Danish *ham, hende, dem, hvem,* originally datives, now also accusatives and partly even nominatives（while it is true that in *mig* and *dig* the acc. has outlived the datives）...”（Jespersen 1894: 183）

[13] エルヴダーレン方言では語頭音 h–が代名詞に限らず脱落している（ɪʟ åvå /aus/og，ス ha(va)/hus/hög，英 have/house/high，ド haben/Haus/hoch）。

(11)	主格―目的格		デ	ス	ブ
3人称単数	人間	男性	han ― ham	han ― honom	han ― ham/han
		女性	hun ― hende	hon ― henne	hun ― henne
	物事	両性	den ― den	den ― den	den ― den
		中性	det ― det	det ― det	det ― det
	複数		de ― dem	de[dɔm] ― dem[dɔm] /dom /dom	de ― dem

(12)		ニュ 主格―目的格	ェル 主格―対格―与格
3人称単数	男性	han ― han/honom	an/n ― an/n ― onum/om
	女性	ho ― ho/henne	o̧[ɔ̃]― ona/on ― enner/ener/en
	中性	det ― det	eð ― eð ― dyö
	複数	dei ― dei	dier ― diem/dyöm ― diem/dyöm

(13)		ア/(古ノ) 主格―対格―与格―属格	フェ
単数	男性	hann ― hann ― honum ― hans	hann ― hann ― honum ― hansara
	女性	hún ― hana ― henni[14] ― hennar	hon ― hana ― henni ― hennara
	中性	það(古ノ þat) ― það(古ノ þat) ― því ― þess	tað ― tað ― tí ― tess
複数	男性	þeir ― þá ― þeim ― þeirra/(古ノ þeir(r)a)	teir ― teir ― teimum ― teirra
	女性	þær ― þær ― þeim ― þeirra/(古ノ þeir(r)a)	tær ― tær ― teimum ― teirra
	中性	þau ― þau ― þeim ― þeirra/(古ノ þeir(r)a)	tey ― tey ― teimum ― teirra

1-3-2. 指示代名詞との関係―低地ドイツ語と北ゲルマン語

3人称代名詞は指示代名詞と語形変化が似ている（清水 2021b: 4f.）。指示代名詞も有性代名詞であるし，3人称代名詞にも照応以外に，発話場面の対象を指示する直示的機能がある。ド Kennst du ***ihn*** dort drüben?「君はあそこの彼を知っているかい」では，話題に出ていない「彼」をいきなり3人称代名詞 ihn で指し示すことができる。ただし，これは人間に限られ，物事「そ

[14] 古ノ henni/honum（Fulk 2018: 190）以外に henne/honom の表記もある。

れ」（ド den Wagen 車，など）を指すことはできない（Duden 2009[8]: 27）。また，指示代名詞は文脈（コンテクスト）内の要素を同定する文脈内指示（テキスト内指示）を通じて，人称代名詞の照応を補う。ド Hans sprach mit Paul und ***seiner/dessen*** Schwester.「ハンスはパウルと彼の（seiner/dessen ←der「その人」の属格）姉妹と話した」では，seiner はハンス，指示代名詞 dessen はパウルの解釈が普通である。

そこで，指示代名詞は 3 人称代名詞に侵入しやすいと言える。たとえばドイツ語では，物事を表す属格目的語には指示代名詞を用いる。次例の指示代名詞属格 dessen（←das それ）は，人称代名詞属格 seiner（←es それ）では不自然になる：ド Behalte dein Geld, ich bedarf ***dessen*** nicht.「君のお金は取っておけ。ぼくはそれが（dessen）必要ないから（bedürfen〈属格が〉必要だ）」（Dal/Eroms 2014[4]: 77）。

低地ドイツ語北低地ザクセン方言では，英 he/she/***it***/they ― ド er/sie/***es***/sie ― オ hij/zij/***het***/zij ― 西フ hy/hja～sy/***it***/hja～sy に対して，ザ he/se/***dat***/se となる（(14)）。本来の人称代名詞中性単数が指示代名詞 dat（英 that/ド das/オ・西フ dat）にお株を奪われているのである。本来の人称代名詞（英 it/ド es/オ het/西フ it）は弱形（ザ 't）として命脈を保っている。

(14) 英 ***It*** rains. / ***It*** is already five o'clock. ド ***Es*** regnet. / ***Es*** ist schon fünf Uhr.
オ ***Het*** regent. / ***Het*** is al vijf uur. 西フ ***It*** reint. / ***It*** is al fiif oere.
↔ザ ***Dat*** regent. / ***Dat*** is al fief Klock. 雨が降る/もう 5 時です

また，無強勢のド es[əs]/オ het[ət]/西フ it[ət]の目的格は，強勢が置かれる主文の文頭（前域）には使えず，指示代名詞ド das/オ・西フ dat に頼っている。

(15) ① ド {***Das/*Es***} wissen wir schon. / オ {***Dat/*Het***} weten we al.
西フ {***Dat/It***} witte wy al. それはもう私たちは知っています
② ド {***Das/*Es***} bin ich nicht. / オ {***Dat/*Het***} ben ik niet.
西フ {***Dat/*It***} bin ik net. それは私ではありません

大陸北ゲルマン語のデンマーク語，スウェーデン語，ブークモールでも，（11）のように，人間を表す 3 人称代名詞 han「彼」/hon, hun「彼女」に対して，物事を表す 3 人称代名詞の座は指示代名詞 den/det「それ」が占めている。複数では，（12）（13）に挙げた例を含めて，þ/d/t- で始まる指示代名詞に完全に乗っ取られている。これは，英語に借用された they-them-their(s) の「th-系列」にあたる。

ドイツ語でも，（16）に示すように，強勢を置く場合には人称代名詞は人間を中心とする有生名詞に限られ，物事には「d-系列」の指示代名詞を用いる傾向が見られる。大陸北ゲルマン語の 3 言語の分布は，これを推し進めた結果と言えるだろう。

（16） ド ① Dort stehen Anna und ***Otto***. ***Ihn*** kennst du wohl noch nicht. あそこにアナとオトー（Otto 男性・人間）がいる。彼のことは（ihn）君はたぶんまだ知らないだろう （Duden 2009[8]: 270）

↔Auf dem Tisch liegen eine Säge und ***ein Hammer***. ***?Ihn*** brauchst du allerdings nicht. 机の上にのこぎりと金槌（Hammer 男性・物事）がある。ただ，それ（＝金槌 ihn）は君は必要ないね （ib. 270）

② Das ist ***meine andere Mitarbeiterin***. Auch ***sie*** kann Ihnen helfen. こちらが私のもう一人の女性の同僚（Mitarbeterin 女性・人間）です。彼女も（sie）またあなたに手助けしてくれるでしょう （ib. 270）

↔Er öffnete ***die letzte Kiste***. Auch ***?sie/diese*** war leer. 彼は最後の木箱（Kiste 女性・物事）を開けた。それ（sie/diese）もまた空だった （ib. 270）

ただし，語頭音 th/þ/d/t- つきの指示代名詞が侵入した語形に，つねに直示的意味があるとは限らない。英語の定冠詞 the（***the*** book↔***that*** book）は好例である。人称代名詞以外でも，「虚辞」（expletive）の英 there は無強勢

で特定の場所を指さず，場所の副詞 there「そこ」と棲み分けている。無強勢の虚辞としての西フ der[dər]/デ der[d̥ɛʀ] も同様であり，強勢を持つ場所の副詞，西フ dêr['dɛ:r]/デ der['d̥ɛ:ʔʀ] と使い分ける。一方，オランダ語の虚辞 er[ər] は無強勢で，指示詞標識 d-の侵入を免れ，強勢を持つ場所の副詞 daar['da:r]「そこ」とは明確に語形が異なる。

(17)　虚辞↔場所の副詞「そこ」

英　***There*** is a book on the table. ↔ The book is over ***there***.
西フ ***Der*** [dər] leit in boek op tafel. ↔ It boek leit ***dêr*** ['dɛ:r].
デ　***Der*** [d̥ɛʀ] ligger en bog på bordet. ↔ Bogen ligger ***der*** ['d̥ɛ:ʔʀ].
オ　***Er*** [ər] ligt een boek op tafel. ↔ Het boek ligt ***daar*** ['da:r].

1-3-3.「母音系列」の中性単数形「主格≠対格」—上部ドイツ語

指示詞標識としての語頭音 th/þ/d/t-を欠き，母音で始まる「母音系列」の人称代名詞中性単数形は，いつも肩身を狭くしているわけではない。ヨーロッパ本国で北部に分布するゲルマン諸語に対して，最南部に位置する上部ドイツ語には，無強勢のド es のほかに，強勢を持つ，「母音系列」の強調形がある。その西側を占めるスイスドイツ語チューリヒ方言の èès やベルン方言の äs などがそれで，人間，とくに子供・女性に使い，直示的意味も備えている。

(18)　強調形—基本形—弱形(以下は主語，カッコ内は標準ドイツ語の語形)[15]

	男性単数（er）	女性単数（sie）	中性単数（es/'s）	複数（sie）
チュ	èèr — èr — er	sii — si/se — s	èès — ès — es/s	sii — si/se — s
ベ	ăr/är — är — er	sii/si — si — Ø	ăs/äs — es — es/'s	sii/si — si — Ø

チュ Wèr isch ***es***?— ***Èès*** hät ***s*** gmacht.　それは (es) だれですか—その子 (こ

[15] 正書法には類書の間で差がある（チュ Gallmann 2015³: 183, Schobinger 2007³: 64, Weber 1987³: 159; ベ Pinheiro-Weber 2010³: 22, Marti 1985: 92, 1985²: 65 参照)。

そ）が（強調形 èès）それを（弱形 s）したのです（Gallmann 2015[3]: 183）

ベ Was seit de ächt ***äs*** derzue, wenn är geng näbenuse graset? 旦那（＝彼 är）がいつも（geng）浮気しているのに（wenn～näbenuse graset），それについて（derzue）いったい（de ächt，ド denn echt）あの彼女は（強調形 äs）何と（was）言っているのか（seit)?

（Von Greyerz/Bietenhard 1997[6]: 31）

スイスに関係する作家の作品には，人間を表す es を用いた「前置詞＋es」がよく登場する。(19) はその一例である。標準ドイツ語の es は無強勢なので，前置詞とは使わず，「R-代名詞」（R-pronoun）を用いて「da(r)-前置詞」とする。とくに北部ではその傾向が強い（Duden 2009[8]: 271）。

(19) ド Er trat zum Bett des Kindes hin und beugte sich ***über es***. 彼は子供のベットに近寄り，その子の上に（über es）身をかがめた

（Carl Zuckmayer 1896–1977, Eggeling 1961: 137）

さらに，チューリヒ方言やベルン方言では，3 人称代名詞単数中性形が強調形の場合に，主格と対格で語形が明確に異なる。これは印欧語全体としても非常に珍しい。印欧祖語の中性主格は対格からの転用なので，両者は同形のはずだからである。(20) の強調形は有生（人間，とくに女性・子供）の意味を表す。「チュ ins/ベ ihns」は「男性対格強調形 チュ inn/ベ ihn＋中性対格弱形 チュ s/ベ 's」の複合である（Weber 1987[3]: 159, Russ 1990: 377, Howe 1996: 275）。

(20) 3 人称代名詞中性単数

強調形—有生（人間，とくに女性・子供）：

チュ 主格 èès↔対格 ins　　ベ 主格 äs↔対格 ihns

弱形：チュ 主格 es/s～対格 s　　ベ 主格 es/s～対格 's

チュ Uf ***ins***, cha me si verlaa ! あの子/彼女なら（uf ins 強調形），（人は me）

信頼する（si verlaa，ド sich verlassen）ことができる（cha）！
（Weber 1987[3]: 159）

ベ Si hei gäng guet für ***ihns*** gsorget.　彼らは（si）常に（gäng）よく（guet）あの子/彼女の（für ihns 強調形）世話をした（hei～gsorget）
（Marti 1985: 94）

注意を要するのは，両者が人間を中心とする有生名詞，とくに子供と女性を指す点である。これは上部ドイツ語の西側を占める他のアレマン方言にも該当する。たとえばアルザス方言の éns も女性に限られ，普通は若い女性を表し，主文平叙文の文頭（前域）にも現れる（ｱﾙ ***Éns*** kènn i nét. [ɪns kʰɛn i nɪt][16] その子/彼女は私は知りません，Philipp/Bothorel-Witz 1990: 323）。バーゼル方言の強調形 ääs/基本形 äs も，対格 ins/ins ―与格 im（m）/im を含めて，人間（女の子など）や生き物に使う（Suter 1992: 77）。

一般にアレマン方言では人名に定冠詞をつけるが，女性名は親族名称を含めて，改まった場面以外では中性の扱いを受ける（ベ ***ds*** Anna アンナ（ベ ds＝ド das））。指小形による女性名もそうである（ベ ***ds*** Ann***i***/Ann***eli***/Änn***eli***/Muet***i***←Anna/Mueter 母）。一方，男性名の指小形は自然性が優先されて，男性の扱いのままである（ベ ***der*** Peter***li***/Vatt***i***←Peter ペーテル/Vatter 父，ﾁｭ ***de*** Hein***i***←Hein ヘイン（ﾁｭ de＝ド der））（Marti 1985: 81, Werner 1999: 67）。これは，女性が中性と結びつく西ゲルマン語の傾向の反映と言えよう（清水 2021a: 47–50）。

1–3–4.「h–系列」の中性単数形「主格≠対格」―フリジア語群

アルプスの麓（ふもと）から遠く離れた北海沿岸のフリジア語群でも，同様の現象が見られる。フリジア語群には「北海ゲルマン語的特徴」の一環で再帰代名詞がなく，人称代名詞で代用する。北フリジア語モーリング方言や西フリジア語では，再帰用法として用いた場合には，人称代名詞中性単数の主格と対

[16] アルザス方言のつづりは Brunner（2001）に準拠して示す。

格の語形は一致しない。再帰用法には「h-系列」の語形を用いる。

（21）　3人称代名詞中性単数：再帰用法

① モ 主格 dåt/hat/et/'t↔対格 ham　②西フ 主格 it/'t↔対格 him

① モ ***Dåt*** ferstoont ***ham***.　それは（dåt）自明だ（自分を（ham）理解する（ferstoont））（ド ***Das/Es*** versteht ***sich***.）　（清水 1992: 100）

Dåt luunt ***ham*** ai.　それは（dåt）やってもむだだ（自分を（ham）報いない（luunt ai））（ド ***Das/Es*** lohnt ***sich*** nicht.）　（ib. 102）

比較：Wan'm ***dåt*** for me düünj?　君たちは（'m←jam）それを（dåt，ド das/es）私のために（for me）やってくれるかい（wan～düünj）　（ib. 101）

Jü twoit ***dåt bjarn*** än tjucht ***et*** önj.　彼女は（jü）その子供（の体）を（dåt bjarn）洗い（twoit），その子に（et，ド es）服を着せる（tjucht～önj）（ド zieht es an）　Walker/Sjölin（1986: L 7.1）

② 西フ ｛***It waar/It***｝ hold ***him*** goed.　｛天気（it waar）/それは（it）｝よく（goed）持ちこたえた（hold him，ド hielt sich）　（清水 2006: 173）

比較：Ik wit ***it*** net mear.　私は（ik）それを（it）もう覚えていない（wit～net mear）（ド weiß ***es*** nicht mehr）　（Dykstra 2000: 818）

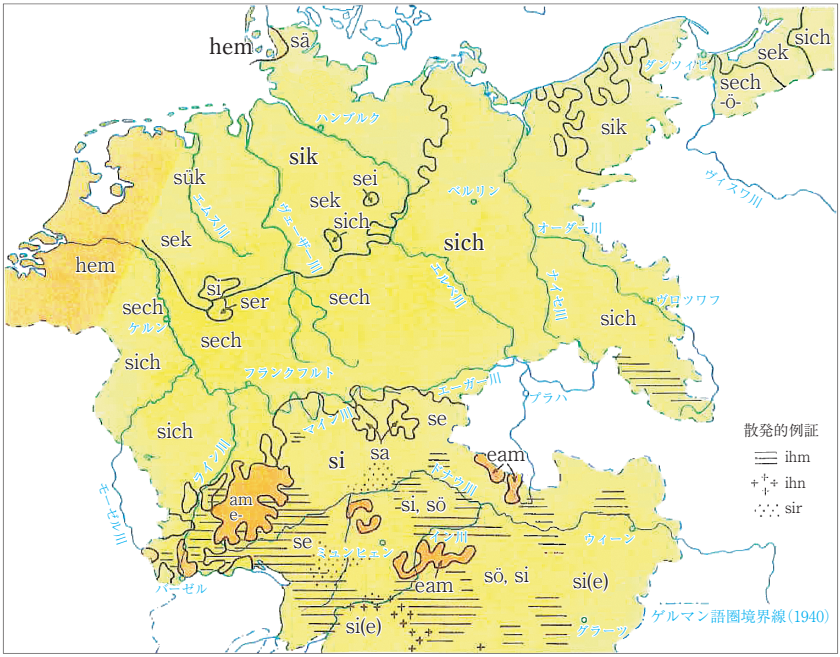
また，現在はほとんど廃れているが（Walker 1990: 17），伝統的なモーリング方言には，3人称代名詞中性単数主格形に有生（人間・動物）の hat があり，ham は hat の目的格だった。約1世紀前に書かれた Bauer（1925: 111）の文法書では，「3人称代名詞中性単数主格―目的格」の語形に hat ― ham だけを記している。ham（＜古フ him）と hat（＜古フ hit）は指示標識 h-を伴う「h-系列」の代名詞に由来し，英語の he/him と同系である。

（22）　3人称代名詞中性単数：有生（人間・動物）：モ 主格 hat↔対格 ham

モ ***Dåt bjarn*** schrait, ***hat*** koon ai släipe.　その子供は（dåt bjarn）泣き叫んでいる（schrait），その子は（hat）眠れない（koon ai släipe）

（Walker/Sjölin 1986: L 6.1）

図 2　再帰代名詞（ド Sein Bruder will *sich* zwei schöne Häuser bauen.）



（König 1998[12]: 155 変更）

※オランダ語圏の hem は方言レベルでの語形。標準オランダ語の zich は高地ドイツ語（ド sich）からの借用。

> ***Hat*** tjücht ***ham*** en jåk önj.　その子/彼女は（hat）上着を（en jåk）着る
> （tjücht ham～önj,　ド zieht sich～an）　（Petersen 2007: 176）

指示代名詞 dåt の進出を受けた人称代名詞 hat は，有生（人間・動物）の意味を帯びるようになった。清水（2021a: 47–50）で述べたように，男・女・中の 3 性を保つモーリング方言に対して，島方言に属する北フリジア語フェリング方言は「男性↔非男性」の 2 性である。フェリング方言では，かつての女性単数主格 jü/対格 hör が中性形 hat/ham「彼女，その子」に駆逐されて，中性形でありながら，やはり人間を表すようになった。そして，物事を表す

中性単数 det「それ」と対峙（たいじ）している（Ebert 1998: 269）。これは伝統的なモーリング方言の hat/ham「彼女，その子」と dåt「それ」の関係と同じである。さらに，これは（11）にあるように，大陸北ゲルマン語の den「それ（両性）」↔det「それ（中性）」に対する han「彼」↔hon/hun「彼女」に似ている。

フリジア語群には，「北海ゲルマン語的特徴」の一環として，古英語と同様に古くから再帰代名詞がない（**図表 2** 参照））。モーリング方言を始めとするフリジア語群では，古来の人称代名詞と指示代名詞の関係が「非再帰用法 dåt↔再帰用法 ham」の棲（す）み分けに反映しているのである。

参考文献

Åkerberg, Bengt (2012) *Älvdalsk grammatik. Under medverkan av Gunnar Nyström*. Ulum Dalska.

Bauer, Erika (1925) *Die Moringer Mundart. Laut- und Formenlehre nebst Sprachproben. Ein Beitrag zur nordfriesischen Dialektforschung*. Heidelberg: Winter.

Braune, Wilhelm/Ebbinghaus, Ernst, A. (1979[16]) *Althochdeutsches Lesebuch*. Tübingen: Niemeyer.

Braune, Wilhelm/Reiffenstein, Ingo (2004[15]) *Althochdeutsche Grammatik I. Laut- und Formenlehre*. Tübingen: Niemeyer.

Brunner, Jean-Jacques (2001) *L'alsacien sans peine*. Chennevières-sur-Marne Cedex: Assimil.

Cyriacks, Hartmut/Nissen, Peter (1998[2]) *Sprachführer Plattdüütsch. Ein Lehr- und Lernbuch*. Hamburg: Quickborn-Verlag.

Dal, Ingerid/Eroms, Werner (2014[4]) *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage*. Berlin/Boston: De Gruyter.

Duden (2009[8]) *Die Grammatik*. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.

Dykstra, Anne (2000) *Frysk-Ingelsk wurdboek/Frisian-English Dictionary*. Ljouwert: Afûk/Fryske Akademy.

Ebert, H. Karen (1998) Genussynkretismus im Nordseeraum. Die Resistenz des Fering. In: Boeder, Winfried/Schroeder, Christoph/Wagner, Karl Heinz/Wildgen, Wolfgang (Hrsg.) *Sprache in Raum und Zeit. In memoriam Johannes Bechert. Bd. 2. Beiträge zur empirischen Sprachwissenschaft*. Tübingen: Narr. 269–282.

Eggeling, H. F. (1961) *A Dictionary of Modern German Prose Usage*. Oxford: Oxford

University Press.

Frings, Theodor/Lerchner, Gotthard (1966) *Niederländisch und Niederdeutsch*. Berlin: Akademie-Verlag.

Fulk, R. D. (2018) *A Comparative Grammar of the Early Germanic Languages*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.

Gallmann, Heinz (2015[3]) *Zürichdeutsches Wörterbuch*. Zürich: Verlag Neue Züricher Zeitung.

Herrmann-Winter, Renate (2006) *Hör- und Lernbuch für das Plattdeutsche*. Rostock: Hinstorff.

Howe, Stephen (1996) *The Personal Pronouns in the Germanic Languages. A Study of Personal Pronoun Morphology and Change in the Germanic Languages from the First Records to the Present Day*. Berlin/New York: De Gruyter.

ヴァインホルト, カール/エーリスマン, グスタフ/モーザー, フーゴー（井出万秀訳）(2017)『中高ドイツ語小文法　改訂第 18 版』郁文堂

Jespersen, Otto (1894) *Progress in Language with Special Reference to English*. London/NewYork: Swan Sonnenschein & Co./Macmillan & Co. (New Ed. with an Introd. by MacCawley, James D. (ed.). (1993) Amsterdam/Philadelphia. Benjamins.

Johannsen, Albrecht (1991 (1956)) *Beerid*. Bräist/Bredstedt. Nordfriisk Instituut.

König, Werner (1998[12]) *dtv-Atlas Deutsche Sprache*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.

Krahe, Hans/Meid, Wolfgang (1969[7]b) *Germanische Sprachwissenschaft II. Formenlehre*. Berlin: De Gruyter.

Kress, Bruno (1982) *Isländische Grammatik*. Leipzig/München: VEB Verlag Enzyklopädie/Hueber.

Lehmann, Winfred (1994) Gothic and the Reconstruction of Proto-Germanic. In: König/Van der Auwera (eds.) 19–37.

Marti, Werner (1985) *Berndeutsch-Grammatik für die heutige Mundart zwischen Thun und Jura*. Bern: Francke.

Marti, Werner (1985[2]) *Bärndütschi Schrybwys. Ein Wegweiser zum Aufschreiben in berndeutscher Sprache*. Bern: Francke.

Merkle, Ludwig (1990[4]) *Bairische Grammatik*. München: Hugendubel.

森田貞雄（1981）『アイスランド語文法』大学書林

Müffelmann, Friedrich (1970) *Althochdeutsch. Einführung in Grammatik und Literatur*. Bonn: Dümmler.

Niebaum, Hermann (1983) Die niederdeutschen Mundarten. Zur Formengeographie. In: Goossens, Jan (Hrsg.) *Niederdeutsch. Sprache und Literatur. Eine Einführung. Band 1:*

Sprache. Neumünster: Wachholtz. 158–174.
Petersen, Adeline (2007) *Friesischer Sprachkurs. Mooringer Frasch*. Bräist/Bredstedt: Nordfriisk Instituut.
Philipp, Marthe/Bothorel-Witz, Arlette (1990) Low Alemannic. In: Russ (ed.) 313–336.
Pinheiro-Weber, Ursula (2010[3]) *Bärndütsch. Ein Lehr- und Lernbuch*. Bern: hep verlag.
Russ, Charles V. J. (ed.) (1990) *The Dialects of Modern German*. London: Routledge.
Russ, Charles V. J. (1990) High Alemannic. In: Russ (ed.) 364–393.
Schobinger, Viktor (2007[3]) *Zürichdeutsche Kurzgrammatik*. Zürich: Schobinger Verlag.
Seebold, Elmar (1984) *Das System der Personalpronomina in den frühgermanischen Sprachen. Sein Aufbau und seine Herkunft*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
清水　誠（1992）「北フリジア語モーリング方言（1）．文法．V. Tams Jörgensen: *Kort spräkeliir foon dåt mooringer frasch* 訳注」『北海道大学文学部紀要』40–3．65–162.
清水　誠（2019）「ドイツ語から見たゲルマン語―名詞の性，格の階層と文法関係」『北海道大学文学研究院紀要』158 号．37–76.
清水　誠（2020）「ドイツ語から見たゲルマン語（2）―属格と所有表現」『北海道大学文学研究院紀要』160 号．37–96.
清水　誠（2021a）「ドイツ語から見たゲルマン語（3）―名詞の性の発達と複数形の形成」『北海道大学文学研究院紀要』162 号．35–101.
清水　誠（2021b）「ドイツ語から見たゲルマン語（4）―冠詞と指示詞」『北海道大学文学研究院紀要』163 号．1–22.
Suter, Rudolf (1992[3]) *Baseldeutsch-Grammatik*. Basel: Christoph Merian Verlag.
Thies, Heinrich (2011[2]) *Plattdeutsche Grammatik*. Neumünster: Wachholtz.
Thomson, Colin D. (1987) *Íslensk Beygingafræði/Isländische Formenlehre/Icelandic Inflections*. Hamburg: Buske.
Von Greyerz, Otto/Bietenhard, Ruth (1997[6]) *Berndeutsches Wörterbuch für die heutige Mundart zwischen Burgdorf, Lyss und Thun*. Muri bei Bern: Cosmos Verlag.
Walker, Alastair G. H. (1990) Frisian. In: Russ (ed.) 1–30.
Walker, Alastair/Sjölin, Bo (1986) *Frasch for önjfångere. Programmierter Lehrgang des Mooringer Friesisch*. Kiel: Nordfriesische Wörterbuchstelle der Christian-Albrechts-Universität Kiel.
Weber, Albert (1987[3]) *Zürichdeutsche Grammatik. Ein Wegweiser zur guten Mundart*. Zürich: Verlag Hans Rohr.
Werner, Ingegerd (1999) *Die Personalpronomen im Zürichdeutschen*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.